貝塚市埋蔵文化財調査報告第10集

地蔵堂廃寺跡発掘調査概報

貝塚市立南小学校屋内運動場増改築
工事に伴う発掘調査

1986. 03. 31

貝塚市教育委員会

はじめに

地蔵堂廃寺跡は、貝塚市の内陸部にある平安時代後半頃の寺院跡を中心として広がる遺跡でありますが、寺院跡に関する遺構のほか当遺跡内には、古墳時代から中・近世に至るまで各種の文化財が散在しております。

今回、発掘調査を実施しましたのは、当遺跡の東側寄りに位置します貝塚市立南小学校内の体育館立て替え工事に先立つもので、調査の結果、中・近世の遺構とともに古墳時代中期の方墳を1基検出しました。埋葬施設はすでに破壊され残っていませんでしたが、古墳の回りを巡る溝の中から多量の須恵器が小破片となって出土しました。

これは、貝塚市域における古墳時代の墓制を考える上において、また近くに位置します前方後円墳の国指定史跡の丸山古墳との関係とともに当地域の歴史を解明する上でたいへん貴重な資料といえます。

ここに、その調査結果の概要をまとめるとともに少しでも先人の残した歴史の一端をみなさま方に理解していただければ幸いかと存じます。

なお、現地調査並びに整理作業にあたり、関係各位より多大の御協力を受け完了できましたことに感謝するとともに、今後、益々の御協力・御指導のほどよろしくお願いいたします。

昭和61年3月

貝塚市教育委員会

教育長 岡　根　和　雄

例　　言

1．本報告書は、貝塚市立南小学校屋内運動場増改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査結果の概要報告書である。

2．発掘調査及び整理作業については、貝塚市教育委員会社会教育課が担当し、昭和60年7月22日より発掘調査を開始し、8月28日に終了した。以後、整理作業を行い昭和61年3月31日に完了した。

3．発掘調査及び本報告書の執筆・編集については、社会教育課西岡巖・勝浦康守が主にこれにあたったほか発掘作業、写真撮影、実測作業およびトレース等の諸作業については下記の諸氏の参加・協力を得て実施したものである。

外業・内業調査員　嘉積由彦

外業調査補助員　石橋秀仁　小林修　西野貴也　山下展功　山西宏司

内業調査補助員　藤原久子　山本和枝

4．本報告書中・検出遺構には、略記号として井戸はＳＥ、溝状遺構はＳＤ、その他性格不明の遺構にはＳＸ等の記号を付している。また、写真図版および遺物実測図で使用する出土遺物の番号はそれぞれ同一番号を付し、分類・整理をはかっている。

5．発掘調査並びに整理作業にあたっては、当該事業課である貝塚市教育委員会総務課並びに建築課、立市南小学校等より多大の協力を受けたほか、現場作業においては委託業者である南一建設株式会社より協力を受け、実施したものである。

目　　次

はじめに

例　　言

目　　次（本文目次・図版目次・挿図目次）

Ⅰ　調査に至る経過……1

Ⅱ　位置と環境……3

Ⅲ　調　　査……4

1．調査区の概要……4

2．検出遺構……7

3．出土遺物……10

出土遺物観察表……16

Ⅳ　ま と め……20

図　版　目　次

図版１　遺　　構

調査区および丸山古墳遠望

図版２　遺　　構

調査区全景

図版３　遺　　構

１．調査区全景

２．古墳全景

図版４　遺　　構

１．古墳北西側周溝内遺物出土状況

２．古墳北東側周溝内遺物出土状況

図版５　遺　　構

１．溝２（ＳＤ－２）全景

２．調査区東部全景

図版６　遺　　構

１．古墳周溝内土層断面

２．井戸２（ＳＥ－２）内土層断面

図版７　遺　　物

図版８　遺　　物

図版９　遺　　物

図版10　遺　　物

図版11　遺　　物

挿　図　目　次

第１図　貝塚市遺跡分布地図

第２図　調査位置図

第３図　調査区域図

第４図　遺構平面実測図

第５図　遺物実測図

第６図　遺物実測図

第７図　遺物実測図

第８図　遺物実測図

Ⅰ　調査に至る経過

今回、発掘調査を実施したのは貝塚市の内陸部に位置する貝塚市地蔵堂286番地内の貝塚市立南小学校の敷地内である。

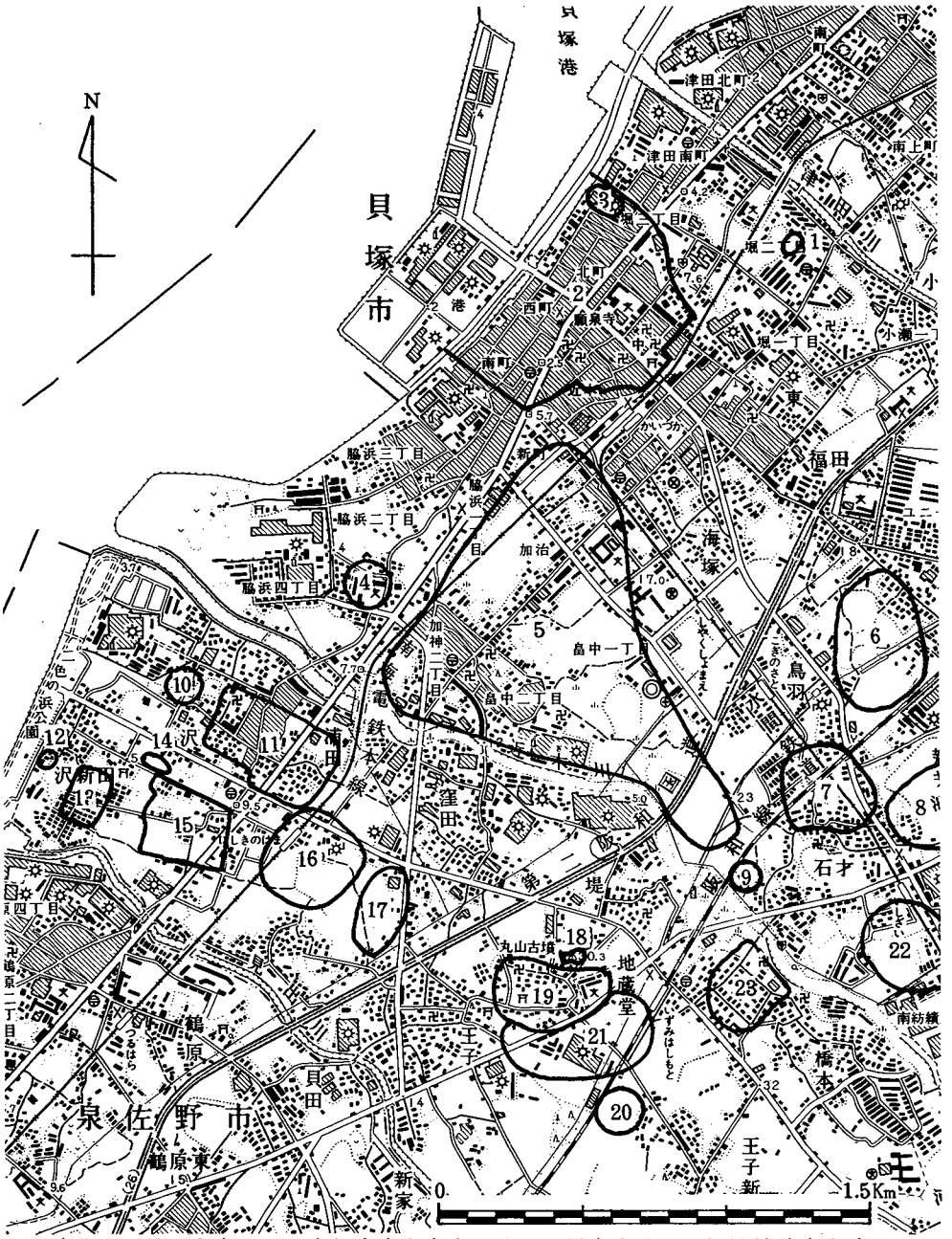
貝塚市では今回昭和60年度事業の一環として、小学校の北東隅に位置している屋内運動場（体育館）の拡張建て替え工事を行うことが計画された。しかしながら、以前から当地区は周知の遺跡として包蔵および近接している地域であるところから、建築担当課より埋蔵文化財の有無の確認について協議の申し入れがあり、まず建て替え工事に先立ち工事計画地域内に埋蔵文化財が所在するかどうかの遺構確認調査を実施した。調査を昭和60年1月11日に幅約2ｍ、長さ約20ｍの遺構確認用試掘トレンチを設定し、ユンボ掘削および人力掘削による遺構検出作業を行った。

試掘調査の結果、現地表面より約30㎝の整地用盛土下で2層に大別できる厚さ約50㎝および20㎝の遺物包含土層を検出し、以下地山面に達した。遺物包含土層内からは小破片となった須恵器、土師器、瓦器、瓦および陶磁器片等が若干出土している。

検出遺構としては、その地山面に切り込む形で幅約0.5～1.0ｍ、深さ約0.05～0.25ｍの溝状遺構等を検出した。遺構内からは土師器片および瓦器片等が極少量出土し、時期的には室町時代を中心とする時期のものと考えられた。

以上の試掘調査結果にもとずき、今回建て替え工事を実施する地区には少なくとも室町時代を中心とする遺物包含土層が顕著に見られ、当時の各種遺構も残存するものと考えられたことから、その試掘調査結果をもとに再度建築担当課と協議の結果、建て替え工事によって破壊を受ける約900㎡の部分について発掘調査を実施することで協議を終え、旧体育館の取り壊し作業終了後直ちに発掘調査を実施するはこびとなった。

発掘調査期間は、昭和60年7月22日より開始し、翌8月28日に終了した。以後、出土遺物等の整理作業を実施し、翌昭和61年3月31日に全て完了した。



1.堀遺跡 2.貝塚寺内町 3.泉州麻生塩壺出土地 4.長楽寺跡 5.加治神前畠中遺跡 6.新井鳥羽遺跡 7.石才遺跡 8.新井ノ池遺跡 9.橋本遺跡 10.沢共同墓地遺跡 11.沢遺跡 12.沢新出遺跡 13.沢海岸遺跡 14.沢海岸北遺跡 15.廃明楽寺跡 16.澱池遺跡 17.窪田遺跡 18.丸山古墳 19.地蔵堂廃寺跡 20.下新出遺跡 21.王子遺跡 22.石才南遺跡 23.積善寺城跡

第1図　貝塚市遺跡分布地図(1：25000)

II　位置と環境

発掘調査を実施した当地域は、昭和52年３月刊行「大阪府遺跡分布地図」には平安時代後期の創建と考えられる寺院跡、地蔵堂廃寺跡として周知されている遺跡の東側寄りに位置する貝塚市立南小学校敷地の一角である。

貝塚市立南小学校は、国鉄阪和線和泉橋本駅西方約 250 ｍの府道和泉泉南線沿いに所在し、現在の海岸線より平行して走る国道26号線、南海電鉄および第二阪和国道を経て約２㎞内陸部に入った海抜約26ｍの位置にある。調査地区は、その南小学校内の北東隅に位置している現体育館部分である。

調査地区の現状は、学校建設等により水平に整地されており、旧地形等を伺い知ることは全くできない。周辺地域の地形から見た場合、当小学校を中心として北西および北東方面への地形的下がりが認められるところから、微高地形を有した小段丘上に位置するものと考えられる。

当地域に近接する周辺遺跡については、調査地区の北西約 100ｍ において国の史跡指定を受けている全長約66ｍ、前方部最大幅約27ｍ、後円部径約43ｍを測る貝塚市唯一の前方後円墳である丸山古墳が前方部をほぼ西方に向け所在している。丸山古墳の築造時期については現在までに時期決定を可能とする遺物等の発見には至っていないことからやや不明瞭なものといわざるを得ないが、おおむね５世紀代前半から中頃にかけての古墳かと考えられる。また、その他古墳時代の遺構としては、昭和56年度および本年度の当小学校内の発掘調査で５世紀後半から末頃と考えられる円墳の周溝部を合わせて２基分確認しているが、これら古墳に関係を有するような生産地あるいは集落跡等についてはまだ発見されていないのが現状である。

その他の周辺遺跡としては、第１図に示すように当遺跡の南側では古代末から中世にかけての遺跡である王子遺跡がある。かつての調査で12世紀末から14世紀末ないし15世紀初頭頃までと考えられる建物跡（掘立柱建物跡）や、それに伴う井戸、土壙、溝等の各種遺構が多量の遺物とともに検出されていることから、中世にはかなり開発がおよんだ地域と考えられる。さらに、南側の国鉄線を渡った地域には、遺跡の詳細については不明瞭であるが、古墳時代の遺物散布地である下新出遺跡やさらに国鉄和泉橋本駅東側には、中世末の城跡である積善寺城跡や近木川を挟んで積善寺城跡の北方には、中世から近・現在まで営まれている墓地遺跡の橋本遺跡が所在している。ただ、先にも触れたがこれら各遺跡の

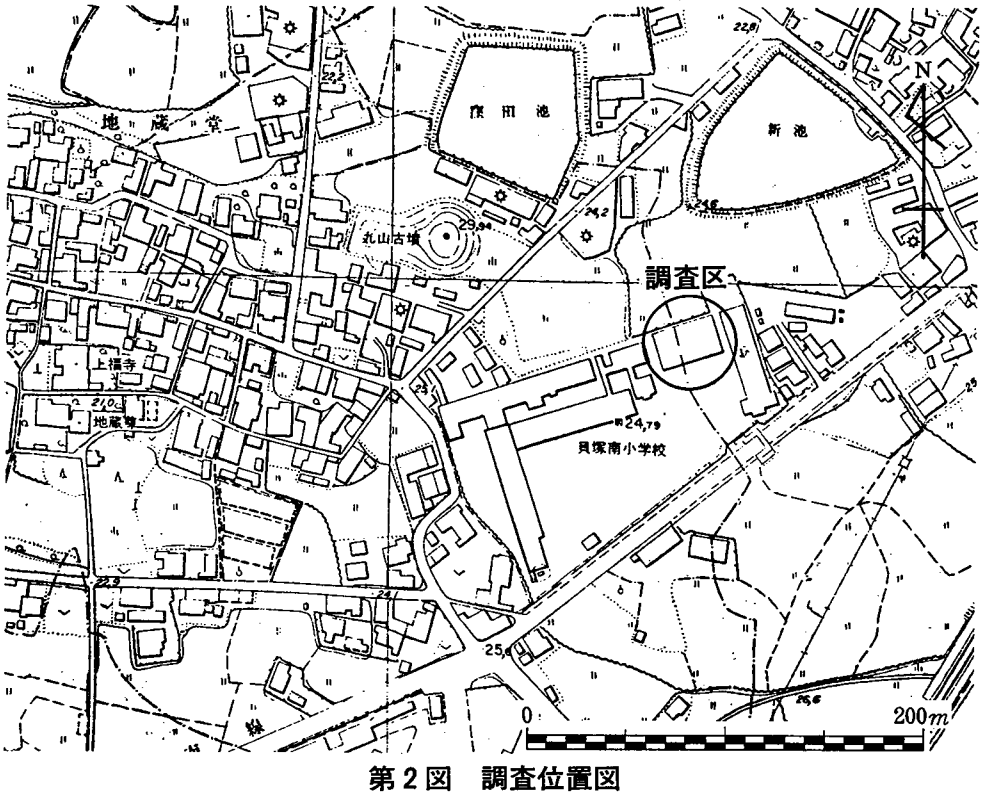
詳細な性格等については、まだ充分な解明が行われていないのが現状である。

Ⅲ　調査

1．調査区の概要

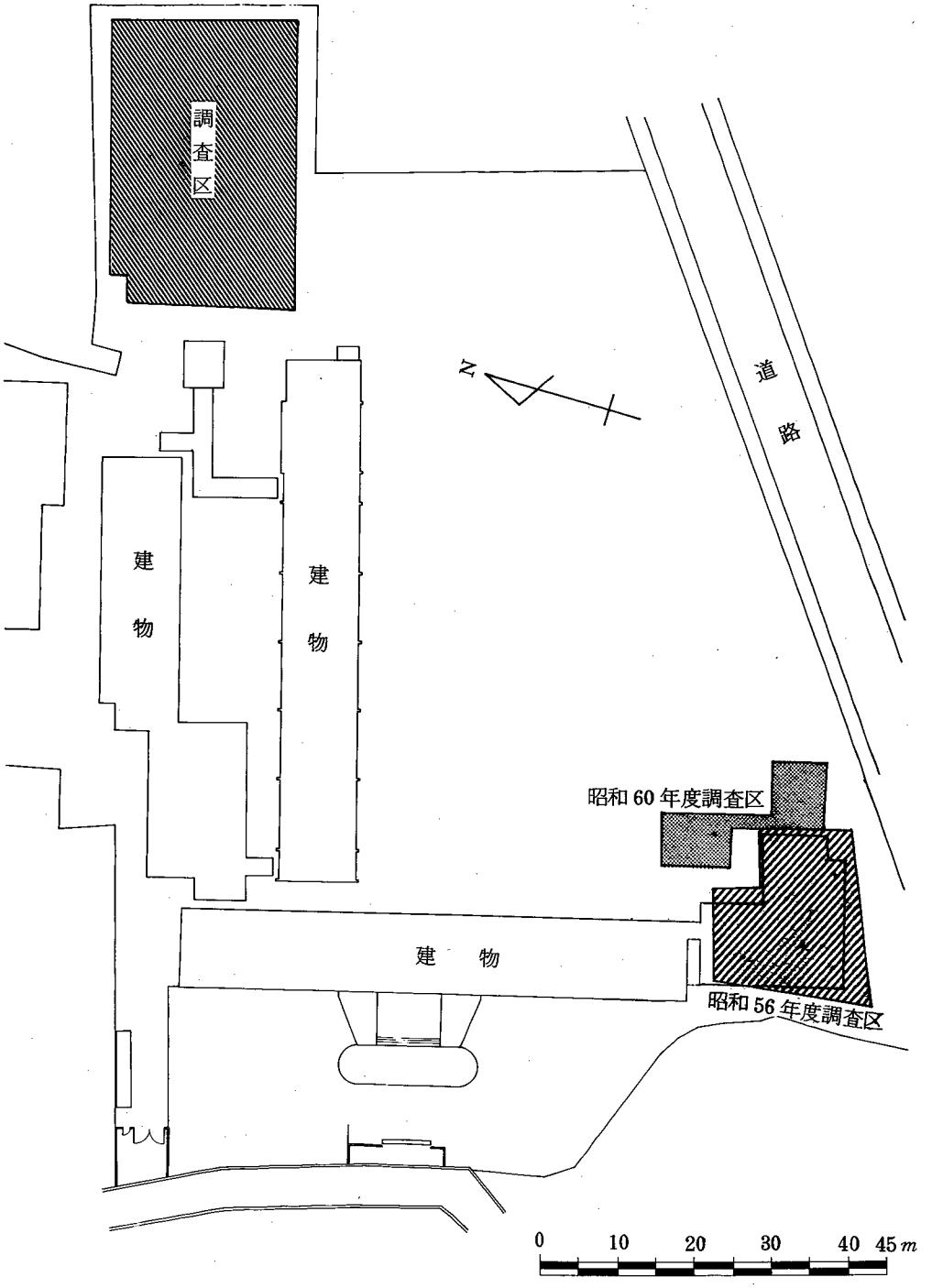
今回の調査区は前述しているように、小学校内屋内運動場（体育館）の拡張建て替え工事にかかる部分であり、新体育館の建設により破壊される部分の発掘調査を実施した。調査区はやや方位的にずれるものであるが、おおむね東西方向に長さ約38ｍ、南北方向に約24ｍの計約900㎡である。

基本土層としては、現地表面より約0.3ｍの第１層校庭整地用盛土、約0.1ｍの第２層旧

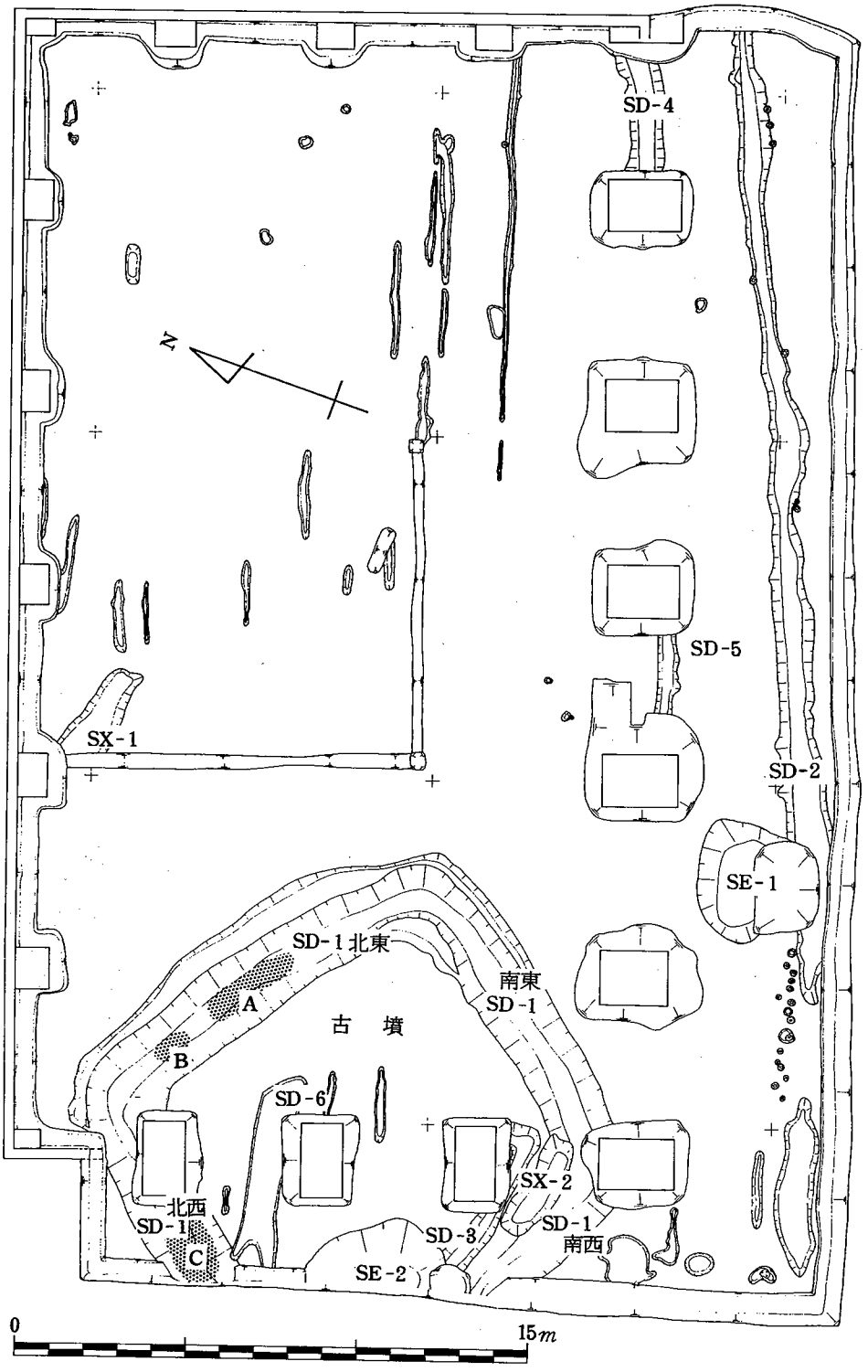


第２図　調査位置図

耕作土、0.3～0.5ｍの第３層淡青黄灰色土および約0.1～0.2ｍの第４層淡茶褐色土層となり、以下黄色地山土となる。遺物包含土層としては、第３・４層で認められるもののそれら包含土層より出土するすべての遺物は小破片となっての出土であり、器種および時期等の判断に耐え得るものは少なかったが、おおむね第３層淡青黄灰色土は中世末あるいは江戸時代頃のものかと考えられ、第４層淡茶褐色土は中世後半頃のものと考えられる。第４



第3図　調査区域図（1：900）



第4図　遺構平面実測図（1：200）

層淡茶褐色土除去後、地山面で検出した遺構としては、大きく古墳時代と中世との2時期に渡るものである。

個々の検出遺構の詳細については、後述することとして、ここではこれら検出遺構についての概要を記すことにする。

古墳時代の検出遺構としては、調査区西端で旧体育館の基礎工事や中・近世の遺構等によりかなり破壊された状況ではあったが、幅約1.8～3.0m、深さ約0.6mの緩やかなU字形を呈する方墳の周溝を検出した。ただ、墳丘部についてはすでに破壊され削り取られていたため埋葬主体部の検出までには至っていない。

中世以降の遺構としては、調査区南端中央部で近世以降のものかと考えられる径約 3.5m、遺構検出面よりの深さ約1.5m を測る素掘りの井戸1（ＳＥ－１）および調査区西側中央部で中世と考えられる復元径約5.0m、遺構検出面よりの深さ約1.0mの素掘り井戸2（ＳＥ－２）をそれぞれ検出している。

溝状遺構としては、調査区南端部でやや曲線を描きながらではあるが、ほぼ東西に調査区内を横切って走る中世と考えられる溝2（ＳＤ－２）やその他各所でＳＤ－２とほぼ同時期とかんがえられかつ同方向に走る溝状遺構を検出しているが、その性格等についてはやや不明瞭なものである。

その他若干の溝状あるいは土壙状となるような性格不明の遺構も検出している。

個々の遺構の詳細については次章で報告するが、今回の発掘調査の成果としては、古墳時代において当地域が丸山古墳を中心として5世紀前半から5世紀末ないし6世紀初頭にかけての墓域的性格を有する地域であると考え得るに足る古墳の存在、さらにそれら古墳を完全なまでに破壊し、耕作地と化すに至った中世遺構の存在であろう。

以下、各検出遺構の詳細について順次個別的に報告することにする。

2．検出遺構

古墳

調査区西端で検出した周溝部のみの残存遺構である。遺構の検出面は、第4層淡茶褐色土を除去したのち、方形に巡る周溝の検出を見たものである。

周溝の形状および規模としては溝幅約1.8～3.0m、遺構検出面よりの深さ約0.6m 程度を測り、溝内断面形はやや緩やかなU字形を呈していた。

古墳全体の規模としては、旧体育館の基礎工事部分の攪乱や当古墳を破壊するに至った中世の各種遺構等により、やや明確さに欠けるところもあるが、ほぼ周溝部の内法で一辺

約９ｍ程度を測る正方形を呈するものと考えられる古墳である。周溝部分をも含めると一辺約14ｍ程度となる。

周溝内埋土の基本土層としては、上層第４層淡茶褐色土層が若干溝内の窪みに堆積した状況となっているが、第５層暗茶褐色土層が最大厚約0.3ｍ程度堆積し、以下約0.15～0.20ｍ厚の第６層黒色土層となり、地山面までほぼ達している。ただ、部分的ではあるが、地山面と第６層黒色土層との間に第７層として暗黄色土層が0.01～0.05ｍほどの厚みで堆積するところも見られた。

今回の調査で出土した遺物は、第５層暗茶褐色土層内より若干量の須恵器片を検出しているが、そのほとんどは第６層黒色土層内での検出であり、また数箇所に集中しての出土であった。出土状況としては、すべて数センチほどの小破片に細かく壊れた状況での出土であり、北東側周溝内ではＡおよびＢグループとして須恵器坏、高坏等がみい出され、さらに狭い範囲となっているが、北西側周溝内よりＣグループとして、各種須恵器片等が検出された。これは当古墳の破壊当時、偶然にこれらの場所に流れたものとは考えにくく、溝内土層堆積状況から見ても当古墳を築造あるいは築造後の被葬者埋葬当時にはこの場所に存在したものと考えられるものである。

墳丘部分については、調査の結果から先にも記しているが、第４層淡茶褐色土層を除去した後すべて地山面に達したことから、墳丘盛土の残存はみい出されなかった。また、埋葬主体部の痕跡すらない状況であった。

井戸（ＳＥ）

井戸１（ＳＥ－１）は調査区の中央部、やや西寄りの南端部分で検出したものである。

旧体育館建設当時の工事用の攪乱壙により約半分ほど破壊されていたが、直径約3.0～3.5ｍのやや楕円形を呈し、遺構検出面よりの深さ約1.5ｍを測る素掘りの井戸である。井戸内埋土は基本的には一層で青黒色土層のややふわふわした土層であり、ほぼいっきに埋め戻された状況であった。土層堆積状況および出土遺物から中世以降のものには間違いなく、江戸時代、それも末ごろ以降かと考えられるものである。

井戸２（ＳＥ－２）は調査区の西端壁面部分で検出した遺構であるが、全体規模の約半分が調査区外へ延びるため正確な形状および規模の把握までには至っていない。

現状から把握できる規模としては直径約５ｍ程度、遺構検出面よりの深さ約１ｍを測り得る素掘りの井戸であり、やや井戸とするには直径の大きさのわりにはかなり浅く、井戸内断面形も斜めに傾斜したＶ字形を呈するものであった。

井戸内堆積土は大きく２層に分かれ、上層は第４層淡茶褐色土および砂質土の混ざったような土層であり、下層はやや砂質土も混ざるが暗灰色粘質土層が埋土となっている。

井戸の時期としては、図示に耐え得るほどの遺物はあまりないものの、土師器・瓦器の小破片が少量検出されていることおよび遺構検出状況から見た場合第４層淡茶褐色土層を除去したのち井戸の検出を見ており、少なくとも中世のものと考えられる。

溝（ＳＤ）

溝２（ＳＤ－２）は調査区南端部で調査区をほぼ東西に蛇行ぎみに横断していく遺構である。また、西方部では部分的に消えてしまっている。

規模としては、溝幅約0.5～1.2ｍ、遺構検出面よりの深さ約0.05～ 0.2ｍ程度とごく浅いものである。流水方向は溝内底部のレベル高より、東側への流れが想定できる。

出土遺物としては、図示に耐え得るものは一片もなかったが、少量の土師器片、瓦器片が出土しており中世ごろのものと考えられる。

ＳＤ－２の北側約2.0～2.5ｍの地点では、旧体育館の基礎工事部分の攪乱と重なっているため明確に検出し得るものではなかったが、溝４（ＳＤ－４）および溝５（ＳＤ－５）がＳＤ－２とほぼ平行に走っており、規模および形状等についても共にＳＤ－２に類似するものであった。

その他の検出溝としては、ＳＤ－２の方向性に合わさるかのように東西方向に走る溝状遺構あるいは中世耕作時の鋤跡かと考えられるものが調査区東側でいくつか検出しているがその性格等については明確にとらえられなかった。

調査区西側の古墳周溝南端部に近いところでは、ＳＥ－２および旧体育館の基礎攪乱によって明確にはなっていないが、溝３（ＳＤ－３）がくの字形に存在している。このＳＤ－３はＳＥ－２との切り合い関係からＳＥ－２よりも古い時期のものと考えられる。形状は、溝幅約0.5～0.6ｍ、遺構検出面よりの深さ約 0.3～0.35ｍを計り得る。溝内堆積土は暗灰色土一層である。出土遺物はまったくなく、性格等については不明である。

その他性格不明の遺構として、ＳＸ－１およびＳＸ－２が存在するが、ＳＤ－３とよく似た方向性ならびに遺構内埋土をしており、少なくともＳＤ－３と同時期あるいは近似する時期の遺構かと考えられる。

3．出土遺物

今回の調査で出土した遺物としては、先にも触れたように調査区西側で検出した方墳の周溝等で検出した須恵器群が遺構に伴う出土遺物としては唯一のものであり、その他図示報告している須恵器以外の遺物については遺物包含土層である第4層淡茶褐色土層等よりの出土である。

以下、須恵器主体の報告ではあるが順次記すこととし、また個々の図示報告遺物については最後に観察表としてまとめている。

須恵器（第5・6図－1～12、図版7～9－1～12）

今回報告する須恵器については先にも触れているところであるが、そのすべては方墳周溝内の出土遺物であり、かつ2次的な移動による検出とは考えにくく、古墳築造時期あるいは主体部墳葬時期かそれに近い時期のものと考えられる。ただ、そのすべては数センチ程度の小破片に破壊され、一種儀式的に投棄されたかのような状況で出土している。

検出場所としては、北西側周溝の出土量が最も多く、Cグループとして土器番号3・7・10～12がそれである。Aグループとしては土器番号1・4・6であり、Bグループは土器番号2・5・6である。ただ、Bグループ出土土器の中にはCグループ内から同一個体となる破片が数片出土している。

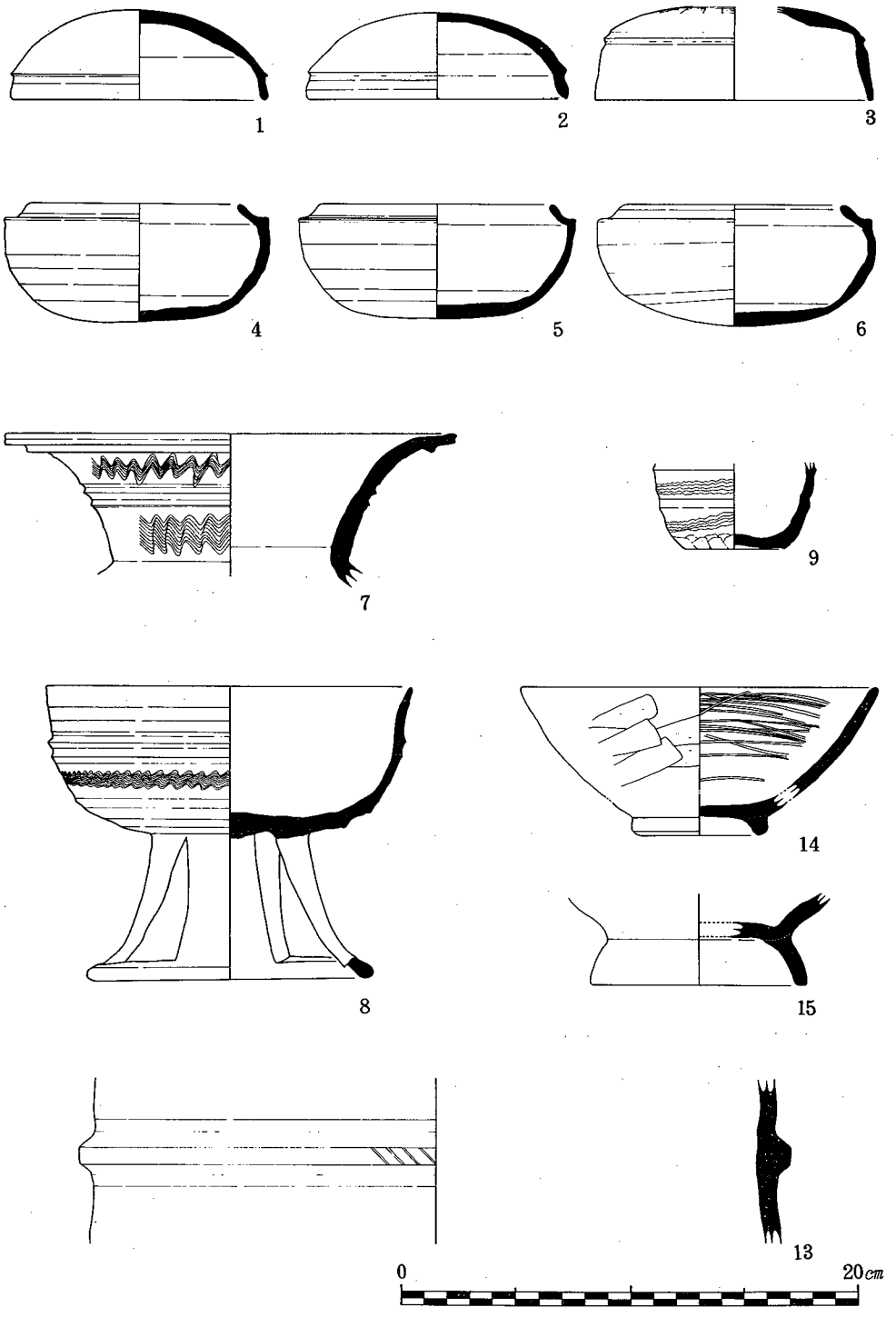
土器の種別としては、杯蓋3点（土器番号1～3）、杯身3点（土器番号4～6）、把手付埦形土器1点（土器番号9）、無蓋高杯1点（土器番号8）、甕3点（土器番号7・10・12）、台付短頸壺1点（土器番号11）の計12点である。

時期としては、5世紀末頃のものと考えられ、陶邑TK23型式に比定し得るものと考えられる。ただ今回の調査で出土した土器番号1・2の杯蓋および土器番号4～6の杯身については、その類例が少なく、5世紀末頃とするには若干問題を残すものである。

埴輪（第5図－13、図版9－13）

今回の調査で1点だけ出土した円筒あるいは朝顔形と考えられる埴輪の小破片である。出土地点は、方墳南東側周溝内第5層暗茶褐色土層内よりの出土であるが、第5層内からは古墳時代以外、中世等の遺物も出土していることから、当古墳と直接関係を有する埴輪とは考えにくく、またこの1点以外今回の調査では検出されておらず、周辺に散在する未発見等の古墳よりの流入品かと考えられる。

時期的には、当古墳出土の須恵器群とほぼ同様の時期、あるいはやや古い時期のものではないかと考えられる。



第5図　遺物実測図（1：3）

黒色土器（第５図－14・15、図版９－14・15）

今回の調査では２個体分が出土している。出土地点としては、土器番号14は方墳の北東側周溝内の埋土上層から検出され、もう１点については第４層遺物包含土層中よりの出土である。両者の土器はともに内外面黒色を呈すいいわゆるＢ型式の土器である。時期としては、おおむね10世紀後葉から11世紀前半までのものと思われる。

このような黒色土器の検出は、当古墳の破壊時期がかなり古い時代には行われていたことをうらづけるものである。

瓦器（第７図－16～18、図版10－16～18・30）

瓦器の出土量は多く、埦あるいは小皿等の器種と考えられるものばかりで、そのほとんどは第４層淡茶褐色土層内および一部の遺構内からの出土である。ただ、図示に耐え得るものはほとんどなく、今回図示しているのは３点（土器番号16～18）のみである。

時期としては、13世紀代より14世紀末葉から15世紀初頭頃と考えられる瓦器埦の終末期のものまで、かなり幅広く存在するように思われる。これは当地域が中世を通じて生産・生活の場であったことをうかがわせるものである。

遺構内よりの出土としてはＳＥ－２より土器番号16が出土しており、13世紀後半から末葉頃のものと考えられる。

土師器（第７図－19～21、図版10－19～21）

瓦器と同様に多量に出土しているものであるが、ほとんどは小破片となっての出土であり、第４層淡茶褐色土層内からのものである。

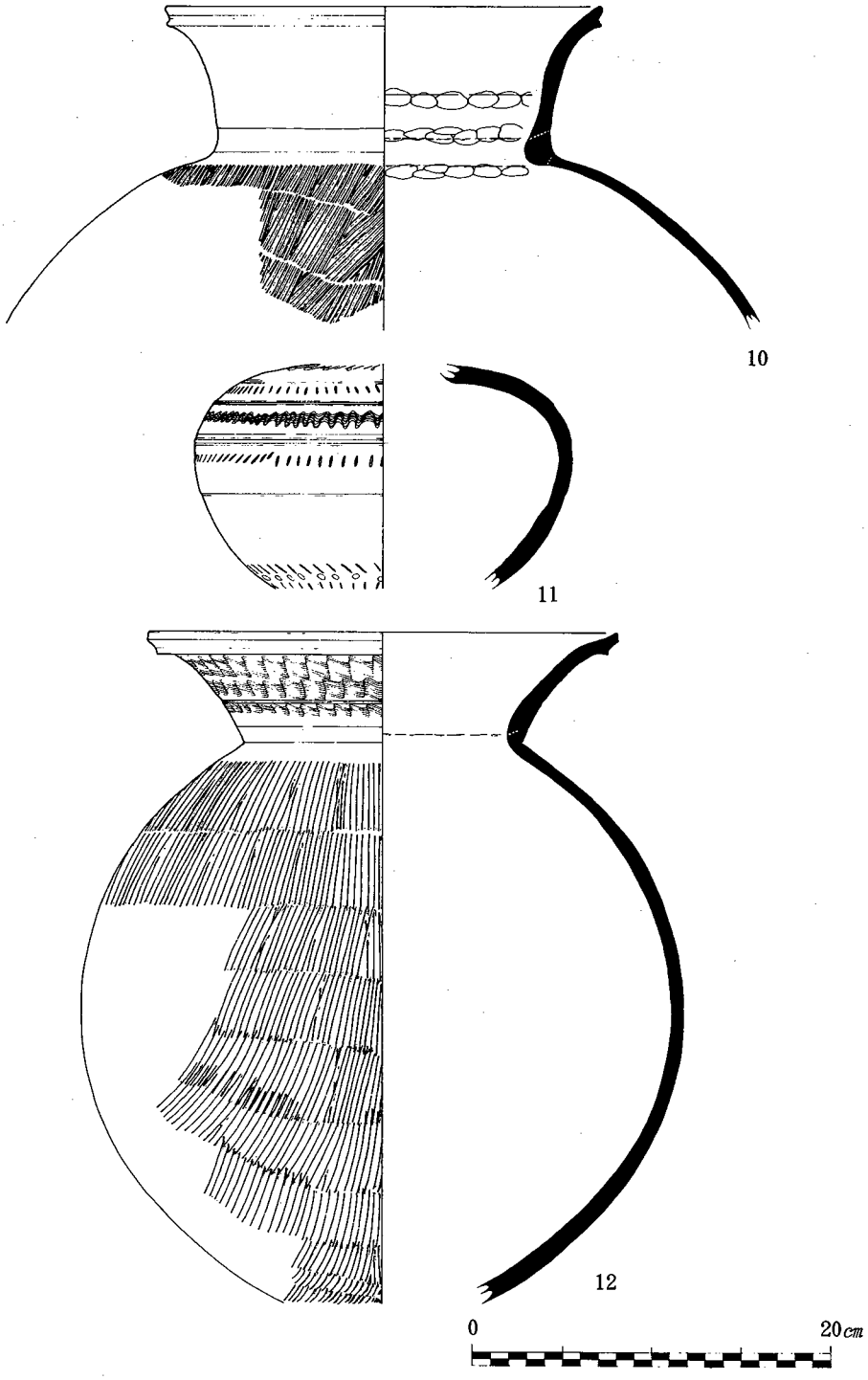
今回、その中でも報告できるものとして３点（土器番号19～21）の小皿小片を図示している。

その他の土器類（第７図－22～29、図版10・11－22～29・31）

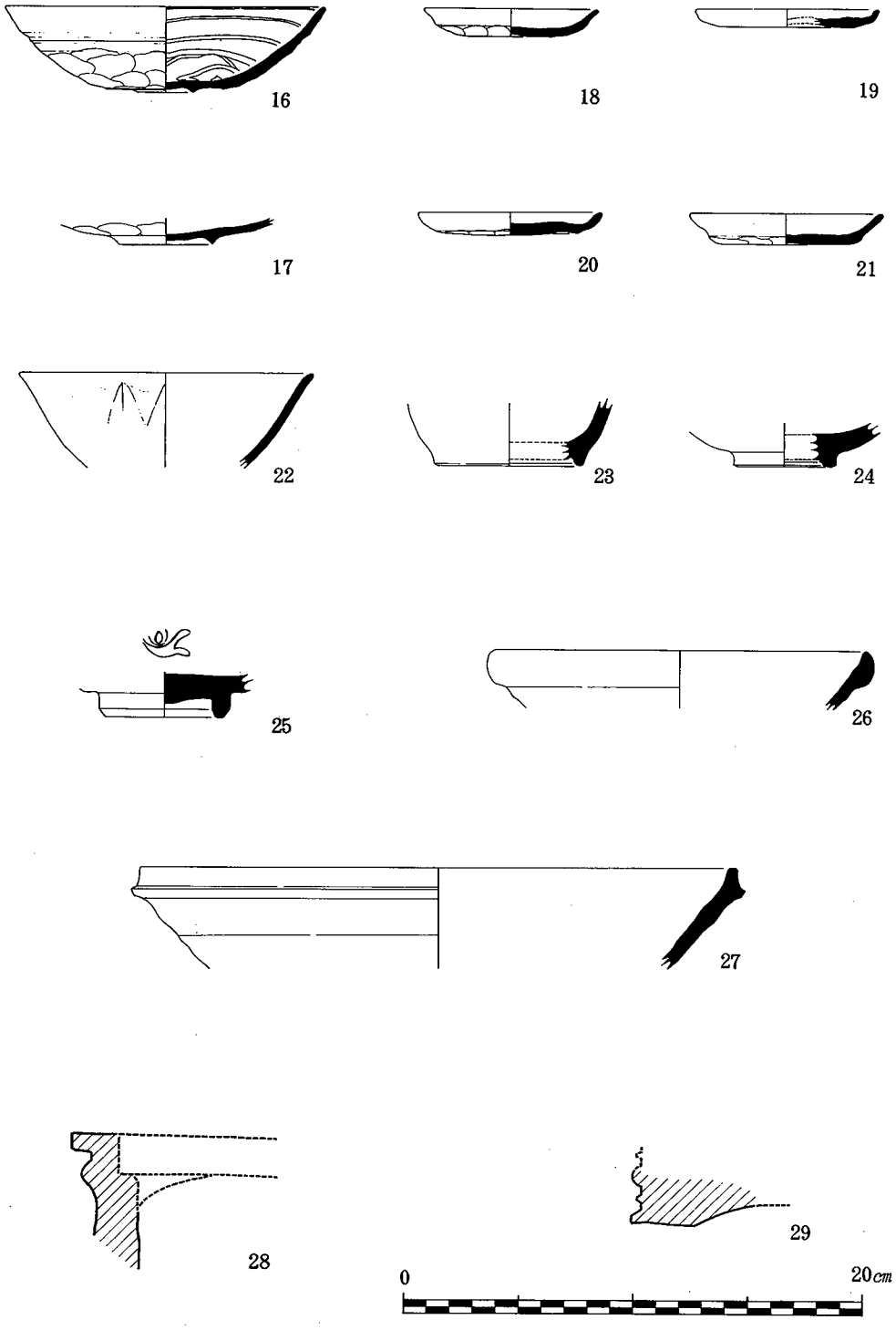
前述の出土土器以外で今回図示報告しているのは以下の土器であるが、それぞれはかなり小破片となっての出土であり、かつそのすべては第４層内よりの出土である。

青磁片５点（土器番号22～25・31）、白磁片１点（土器番号26）、須恵質陶器片１点（土器番号27）および瓦類として蓮華文軒丸瓦片１点（土器番号28）、蓮珠文軒平瓦片１点（土器番号29）等が出土している。

軒平瓦については、当遺跡名からも分かるように平安時代創建の地蔵堂（現正福寺）が近くに所在することから、その寺院跡に関係するものと考えられる。ただ、時代としては



第6図　遺物実測図（1：4）



第７図　遺物実測図（１：３）

鎌倉時代末から室町時代のものであろう。

軒丸瓦については、当地域の約 2.5km北東の貝塚市半田、麻生川地域がその所在地と考えられる白鳳時代の寺院跡、秦廃寺跡出土の八葉蓮華文軒丸瓦と同笵瓦である。これは中世になって当地域へ流入して来たものであろう。

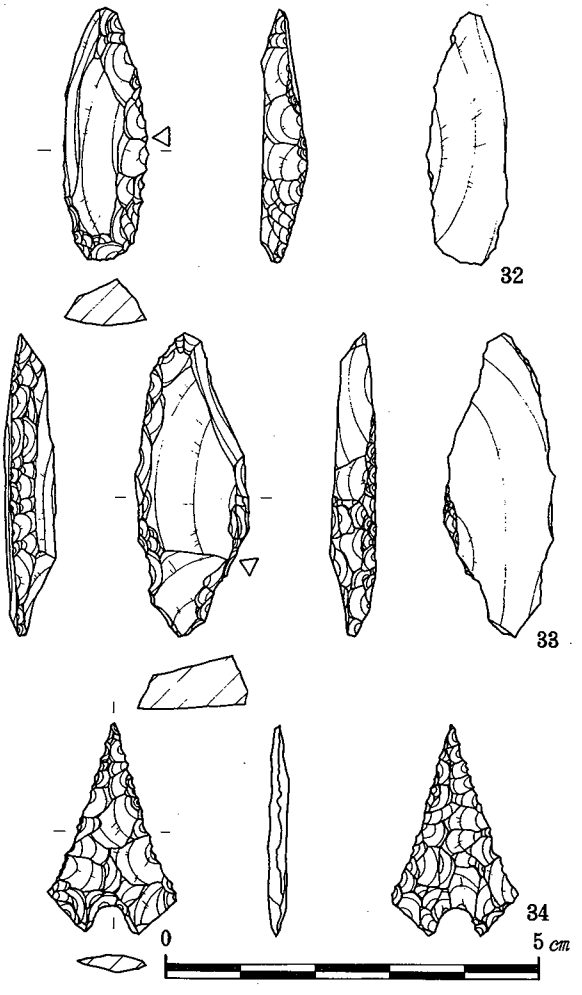
石器（第8図－32～34、図版11－32～37）

今回の調査で石器と断定でき得るものが3点出土している。また、その他にも10数点の剝片が出土しているが、それらはすべてサヌカイトを素材とするものである。

出土場所としては、すべて第3層淡青黄灰色土層および第4層淡茶褐色土層内の中・近世遺物包含土層からの出土である。

石鏃については細部の調整から少なくとも縄文時代に属するものと考えられる。

旧石器時代や縄文時代の遺物が中・近世の遺物包含土層内からの出土とはいえ見い出されることは、この地域にはかなりの古い時代から人々の生活の場であったことを容易にうかがい知ることができるものである。



第8図　遺物実測図（1：1）

出土遺物観察表

土器番号	種別	図版挿図	法量 cm	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	須恵器杯蓋	図版7 第5図	口径11.0 天井部高3.95	天井部は全体に丸味をもち、口縁部は1.0cmと短くやや外方に下り、口縁端部は丸くおさまる。天井部と口縁部を分ける稜はシャープさに欠ける。	天井部外面のヘラ削りの痕跡は見られない。天井部内面⅔不定方向のナデ調整。他はヨコナデ調整。	色調、内面、灰色 外面、灰白色 胎土、径1～2㎜の白色粒砂を含む。 焼成、良好、堅緻
2	須恵器杯蓋	図版7 第5図	口径11.2 天井部高3.8	天井部は全体に丸味をもち、口縁部は1.2cmと短く外方に下る。口縁端部は内傾し、段を構成するが明瞭ではない。天井部と口縁部を分ける稜はシャープさに欠ける。	天井部外面でのヘラ削りの痕跡は見られない。天井部内面½不定方向のナデ調整。他はヨコナデ調整。	色調、内面、灰色 外面、灰白色 胎土、径1～2㎜の白色粒砂を含む。 焼成、良好、堅緻 残存⅔以上
3	須恵器杯蓋	図版7 第5図	口径12.1 天井部高4.0 (推定)	天井部の大部分に丁寧なヘラ削りが施され、ほとんど平らである。口縁部は2.7cmと比較的高く、外方に下り、口縁端部は、水平な面をもつ。天井部と口縁部を分ける稜はシャープさを残す。天井部外面に同心円の上に放射線上に線刻が施される。	天井部外面、回転ヘラ削り調整。他は、ヨコナデ調整。	色調、内面、灰色 外面、灰色 断面、赤褐色 胎土、径1～3㎜の白色粒砂を含む。 焼成、良好、堅緻 残存⅓、反転復元
4	須恵器杯	図版7 第5図	口径9.1 器高5.2	立ち上りは1.0cmと短く、内傾し、端部は丸くおさまる。受部は0.4cmと短く水平にのびる。体部は深く丸味をもち、底は平らである。	体部外面、回転ヘラ削り調整後、ヨコナデ調整。底部内面、不定方向のナデ調整。他はヨコナデ調整。	色調、内面、灰色 外面、灰色 胎土、径1～2㎜の白色粒砂を含む。 焼成、良好、堅緻 残存⅔以上
5	須恵器杯身	図版7 第5図	口径10.0 器高5.0	立ち上りは1.0cmと短く、内傾し、端部は丸くおさまる。受部は0.4cmと短く、水平にのびる。体部は深く丸味をもち、底は平らである。	体部外面、回転ヘラ削り調整後、ヨコナデ調整。底部内面、不定方向のナデ調整。他はヨコナデ調整。	色調、内面、灰色 外面、灰色 胎土、径1～2㎜の白色粒砂を含む 焼成、良好、堅緻 口縁部残存⅓、反転復元
6	須恵器杯身	図版7 第5図	口径10.0 器高5.4	立ち上りは1.0cmと短く、内傾し、端部は丸くおさまる。受部は0.4cmと短く水平にのびる。体部は深く、丸味をもち、底は平らである。	体部外面、回転ヘラ削り調整後、ヨコナデ調整、底部内面、不定方向のナデ調整。他はヨコナデ調整。	色調、内面、灰色 外面、灰色 胎土、径1㎜程度の白色粒砂を含む 焼成、良好、堅緻 残存⅔以上
7	須恵器甕	図版9 第5図	口径19.6 残存高6.1	口頸部は、外反し、端部近くでさらに大きく外反し、端部で上方へ屈曲する。口縁部近くで、断面三角形の凸帯1条、中位で断面三角形の凸帯2条をめぐらし、波状文が2段に施される。口縁端部、凸帯で生ずる稜はいずれもシャープさに欠ける。	ヨコナデ調整。 体部と頸部の屈曲部で粘土紐の接合痕がみられる。	色調、内面、灰色 外面、灰色 胎土、径1㎜程度の白色粒砂を含む 焼成、良好、堅緻 口縁部残存⅙反転復元
8	須恵器無蓋高杯	図版7 第5図	口径15.9 器高12.7 脚部径11.8 脚部高5.4	杯部口縁は、やや外反気味に直線的にのび、端部は丸くおさまる。杯体部中位に断面三角形の凸帯が二条めぐり、その下に波状文が施され、文様帯の下に1個の飾りつまみが付く。脚部は、外反して下り、端部近くでさらに外方に屈曲し、先端は丸くおさまる。脚部4方向に長方形の透しを刻む。	杯底部、回転ヘラ削り調整後、ヨコナデ調整、　内面⅔、不定方向のナデ調整　他はヨコナデ調整。	色調、内面、灰色 外面、灰色 胎土、径1～2㎜の白色粒砂を含む 焼成、良好、堅緻

土器番号	種別	図版挿図	法量 cm	形態の特徴	手法の特徴	備考
9	須恵器把手付埦	図版7 第5図	底部径4.3	底部片である。体部下位に凹線が1条めぐり、波状文が2段に施される。底部は平らである。	体部外面、手持ち削り調整、他はヨコナデ調整。	色調、内面、灰色 外面、灰色 断面、赤褐色 胎土、径1㎜程度の砂粒を含む 焼成、良好、堅緻 底部残存½、反転復元
10	須恵器甕	図版8 第6図	口径24.2 残存高17.8	口頸部は、外彎気味に上外方へのび、端部で上方へ屈曲する。口縁部近くで断面三角形の凸帯が形成される。口縁部、突帯の稜はシャープさに欠ける。	体部外面、平行タタキ 体部内面、不定方向のナデ調整。 他はヨコナデ調整。頸部内面に粘土紐の接合痕と指おさえの痕跡がのこる	色調、内面、灰色 外面、灰色 胎土、径1～2㎜の白色粒砂を含む 焼成、良好、堅緻 残存¼、反転復元
11	須恵器台付短頸壺	図版9 第6図	最大腹径21.0	口頸部、脚部を欠損する。体部は最大径が中位にあり、肩部は張りがみられず、なだらかに下る。体部には、刺突又、竹管文、波状文、カキ目が施される。	体部内面、指おさえの痕跡がのこる。他はヨコナデ調整。	色調、内面、灰白色 外面、灰白色 胎土、径1～2㎜の白色粒砂を含む 焼成、良好、自然釉付着 体部残存⅓、反転復元
12	須恵器甕	図版8 第6図	口径24.2 残存高37.2	口頸部は、外反気味に直線的にのび、上位で外方へ大きく開き、口縁端部で上方屈曲する。外端面はわずかに凹面が生ずる。口縁部近くで断面三角形の凸帯が形成される。口縁端部、凸の稜はシャープさに欠ける。頸部には沈線が1条めぐり、波状文が3段に施される。	体部外面、平行たたき、体部内面、青海波のタタキメをスリ消している。他はヨコナデ調整、内面頸部と体部の屈曲部に粘土紐の接合痕と指おさえの痕跡がのこる。	色調、内面、灰色 外面、灰色 胎土、径1～6㎜の白色粒砂を含む 焼成、良好、堅緻 残存⅓、反転復元
13	埴輪	図版9 第5図	最大径30.0	体部片である。断面台形を呈する突帯をもつ。突帯に線刻文様が施される。	表面、摩滅が著しく、調整は不明である。	色調、浅黄色 胎土、径1～6㎜の石英、長石、雲母片を含む 焼成、良好 反転復元
14	黒色土器埦	図版9 第5図	口径15.5 器高(推定)6.5 高台径5.2	体部は、高台部付近で屈曲し、外上方にやや内彎気味に直線的に立ち上る。口縁端部は丸くおさめる。	体部外面、横方向のヘラケズリ、内面は幅1㎜程のヘラミガキが施される。	色調、内面、黒色 外面、灰黒色 胎土、径1㎜以下の白色粒砂を含む 焼成、良好 口径残存⅛、高台径残存½、反転復元
15	黒色土器埦	図版9 第5図	高台径9.4	底部片である。高台部は1.9㎝と高く内彎気味に下る。端部は水平面を呈する。	表面摩滅が著しく、調整は不明である。	色調、内面、黒灰色 外面、黒灰色 胎土、径1～2㎜の白色粒砂を含む 焼成、良好 残存、⅛、反転復元
16	瓦器埦	図版10 第7図	口径13.8 器高3.7 高台径2.4	体部と底部で不明瞭な境界線が生じ、体部は外反し、上方に直線的に立ち上る。口縁端部は丸くおさまる。高台は、低平化し、断面三角形を呈する。	体部外面、ヘラミガキは施されず、指おさえによる凸凹が著しい。 口縁端部、横方向のナデ調整、体部内面、5～6条の圏線ミガキおよび連結輪状暗文	色調、内面、黒灰色 外面、黒灰色 胎土、径1㎜以下の砂粒を含む 焼成、良好 残存¼、反転復元

土器番号	種別	図版挿図	法量 cm	形態の特徴	手法の特徴	備考
17	瓦器椀	図版11 第7図	高台径4.0	底部片である。高台は低平化し、断面三角形を呈する。	内底面、連絡輪状暗文	内面、暗灰色 外面、暗灰色 胎土、径1～3㎜の砂粒を含む 焼成、良好 高台部残存½、反転復元
18	瓦器小皿	図版10 第7図	口径7.5 器高1.2	平担な底部より明瞭な屈曲をみせず、短く外反し、立ち上る口縁をもつ。端部は丸くおさめる。	表面、摩滅が著しく、調整は不明である。	色調、内面、黒灰色 外面、黒灰色 胎土、径1㎜以下の砂粒を含む 焼成、良好 残存¼、反転復元
19	土師器小皿	図版10 第7図	口径7.8 器高0.8	平底の底部をもち、明瞭な屈曲をみせず、緩やかに内彎し、端部に至る。端部は丸くおさまる。	口縁部、内外面に横方向のナデ調整。	色調、内面、淡黄橙色 外面、淡黄橙色 胎土、径1㎜以下の砂粒を含む 焼成、良好 残存¼、反転復元
20	土師器小皿	図版10 第7図	口径7.9 器高1.4	平底の底部をもち、屈曲せず緩やかに内彎し、端部に至る。端部は丸くおさまる。	口縁部内面、様方向のナデ調整。	色調、内面、淡橙色 外面、浅黄色 胎土、径1㎜以下の砂粒を含む 焼成、良好 残存、¼、反転復元
21	土師器小皿	図版10 第7図	口径8.3 器高1.4	平底の底部をもち、明瞭な屈曲をみせ、口縁部が外上方に立ち上がる。端部はおさまる。	表面、摩滅が著しく、調整は不明である。	色調、内面、浅黄色 外面、淡橙色 胎土、径1㎜以下の砂粒を含む 焼成、良好 残存¼、反転復元
22	青磁碗	図版11 第7図	口径12.7	口縁部片である。外面に蓮弁文様が施される。	釉色は、淡青緑色である。	龍泉窒系か？ 反転復元
23	青磁碗	図版11 第7図	高台径6.2	底部片である。高台内面は垂直面、外面は70°の傾斜面をもつ。体部は、高台部から、すぐに外傾する。外底面の刳りは浅い。	釉色は、淡青緑急である。釉は、内外面および高台部外面に施される。	反転復元
24	青磁碗	図版11 第7図	高台径4.1	底部片である。高台内面は70°の傾斜面、外面は、垂直面をもつ。	釉色は、淡青色である。釉は内面全体と、体部外面に施される。外底面の刳りは浅い。	反転復元

土器番号	種別	図版挿図	法量 cm	形態の特徴	手法の特徴	備考
25	青磁碗	図版11 第7図	高台径5.1	底部片である。外底面、刳りは高台ぎわが深く、中央で凸部が生ずる。底面に線刻文様が施される。	釉色は、淡暗緑色である。釉は、内面全体、外面は高台部のきわにまで及ぶ。	高台部残存½、反転復元
26	白磁碗	図版10 第7図	口径16.1	口縁部片である。幅1.6cm、厚さ0.9cmの玉縁状口縁をもつ。口縁部での貫入はみられない。	釉色は、乳白色である。	反転復元
27	須恵質陶器練鉢	図版10 第7図	口径25.9	口縁部片である。体部は外反気味に直線的にのび、口縁部近くで内彎気味に立ち上り、端部は、平担面を呈する。口縁部近くで断面台形の突帯をもつ。	内外面、ヨコナデ調整	色調、内面、灰色 外面、灰色 胎土、径1～2mmの砂粒を含む 焼成、良好 口縁部残存⅙、反転復元
28	軒丸瓦	図版10 第7図	外縁幅0.7	単弁一葉分残存。八葉単弁形になるものである。中房部欠損。	笵離脱後外縁端面および、側面を一部ヘラ削り調整を施す。	色調、青灰色 胎土、径1mm以下の砂粒少量含む 焼成、良好、堅緻
29	軒平瓦（連珠文）	図版10 第7図	外縁幅0.4	径約1cmの半球状の珠文4個残存。内外区を分ける幅0.3cm程度の圏線がめぐる。顎部は、曲線顎を呈す。	平瓦部の端面に粘土塊を付け、瓦当面を約2倍の厚味としてから、模様を施している。側面、顎部はヘラ削りを施した後、ナデ調整。	色調、灰色 胎土、径1mm程度の砂粒を含む 焼成、良好
32	サヌカイト製基部整形背付石器	図版11 第8図	最大長3.38 最大幅1.13 最大厚0.64	横形剝片を素材とする。素材の打面側に極厚形表面細部調整による切りとりが施され、背部整形となる。さらに素材の左縁で薄形、厚形表面細部調整による切りとりと刃潰しが連続し、基部を作出する。背部整形の輪郭は曲線形を呈する。旧石器時代の型式に属する。		
33	サヌカイト製基部整形背付石器	図版11 第8図	最大長4.10 最大幅1.53 最大厚0.71	横形剝片を素材とする。素材の先端側に極厚形表面細部調整による刃潰しが施され、背部整形となる。素材の打面側中央から左縁端にかけて、台石上極厚形細部調整による切りとりが施され、背部と連結し、基部を作出する。背部整形の輪郭は曲線形を呈する。旧石器時代の型式に属する。		
34	サヌカイト製凹基無茎石鏃	図版11 第8図	最大長2.80 最大幅1.69 最大厚0.24	素材の性状については不明である。細部調整は平形両面細部調整が施され、中央断面形が両凸形を呈する。基部は薄形両面細部調整が施され、極凹形を呈する。		

Ⅳ　まとめ

今回の発掘調査の成果として、検出した主な遺構としては大きく２時期に分かれるものである。

１つは13世紀から14世紀にかけての中世の各種遺構群であり、１つはその中世には少なくとも完全といってもいいほどに破壊・消滅させられた５世紀末頃と考えられる古墳時代中期の方墳の存在である。

古墳の検出については、今回の調査以外昭和56年度および本年度において当小学校々庭内の発掘調査で合計２基の円墳の一部を確認しており、今回で３例目の発見である。さらに、方墳の検出としては今回が貝塚市にとっては初めての発見になるものである。これは、国指定史跡の丸山古墳（前方後円墳）に近接して今までに３基の古墳が検出されたことになり、少ない調査面積のわりには、これらの古墳を含め丸山古墳を中心として当地域に数基あるいは数十基の古墳が築造されていた可能性を示唆するものであり、言い替えれば古代大和政権下における当地域を支配した豪族の墓域的性格を有する地域かと考え得るもので、当地域が古墳時代の地方豪族の一拠点となっていたものと考えられよう。

古墳の破壊・消滅する時期については、古墳の周溝検出時に周溝内埋土上層より１点の黒色土器埦の破片が検出されており、この遺物から少なくとも10世紀末から11世紀頃にはかなり破壊されたものと考えられる。さらに、墳丘を完全なまでに破壊し、古墳の痕跡を全くとどめず平担地となって、水田化されるのは第４層淡茶褐色土層並びにＳＤ－２やＳＥ－２等の時期である。これは、出土遺物より少なくとも13世紀後半から14世紀にかけてのころであろう。

このように、今回の発掘調査の結果から推察できることは、古墳時代の当地域の状況を考える上において、当地域周辺部には古墳時代あるいはそれ以前からの人々の居住空間の存在が考慮されるところであり、今後の調査の進展によっては一地域における古墳時代の生活および生産の地域的メカニズムが解明できる可能性をもっているたいへん重要な地域であると考えられる。

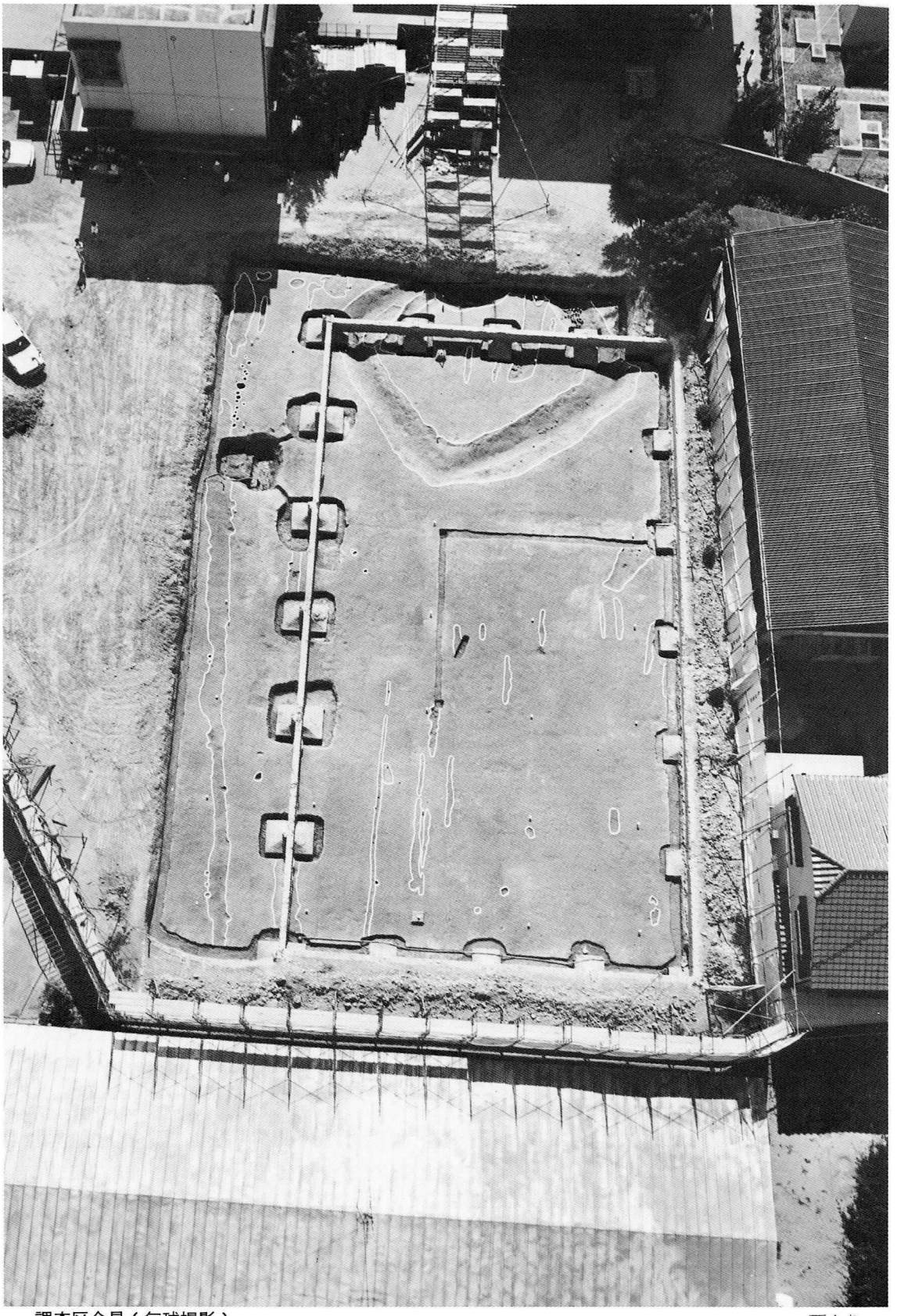
さらに、出土遺物の中で旧石器時代の遺物が２点出土していることについても、今後当地域あるいは泉州地域の旧石器時代を考えていく上において、たいへん重要な発見であると考えられる。

図　　版

図版1　遺　構

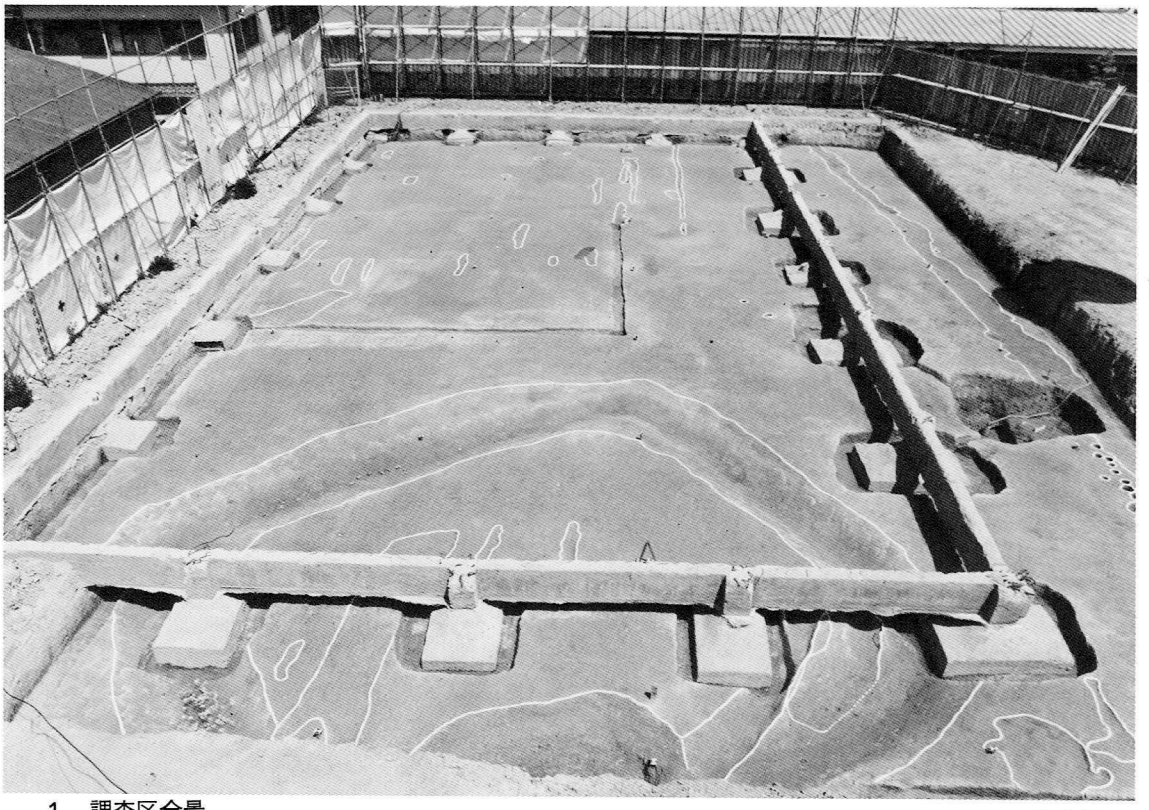
調査区および丸山古墳遠望（気球撮影）　西より

図版2　遺　構

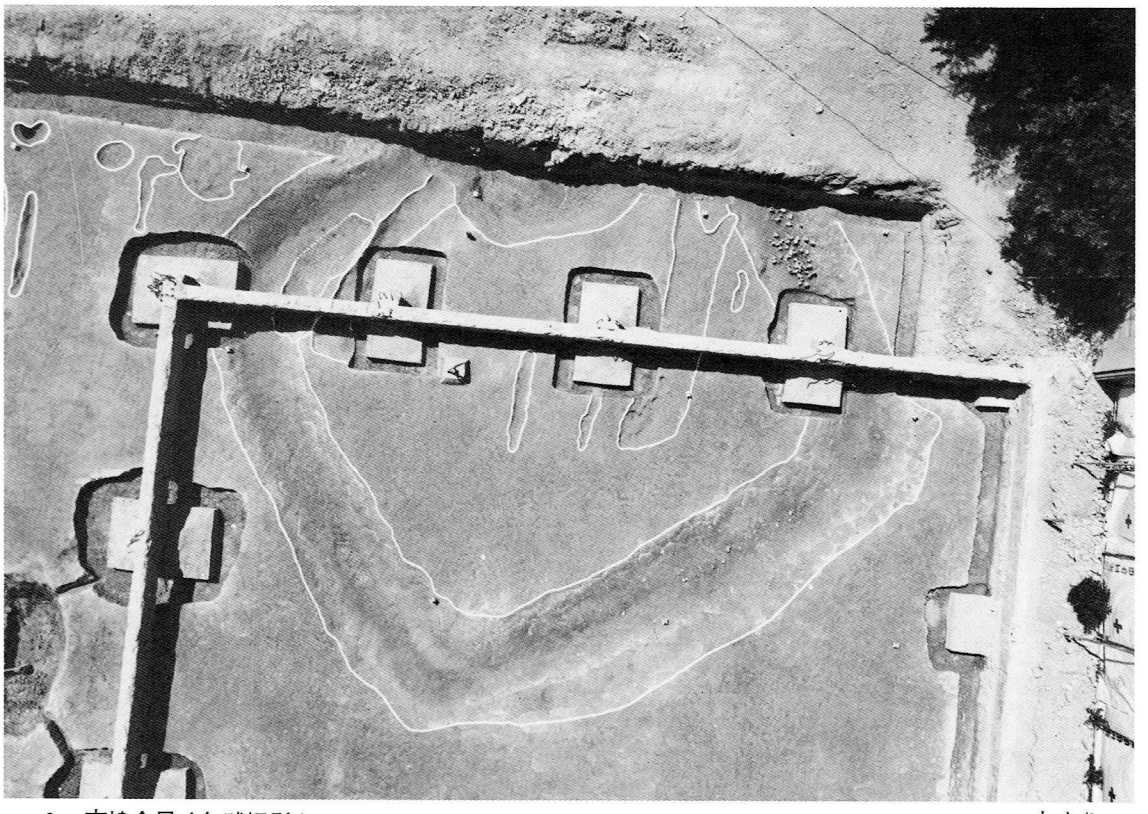


調査区全景（気球撮影）　　西より

図版3　遺構



1.　調査区全景　　東より



2.　古墳全景（気球撮影）　　上より

1. 古墳北西側周溝内遺物出土状況　　北西より

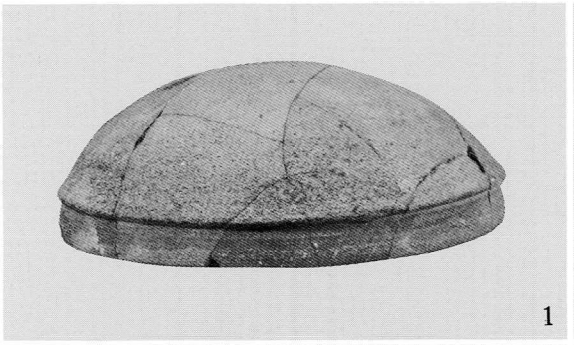
2. 古墳北東側周溝内遺物出土状況　　南東より

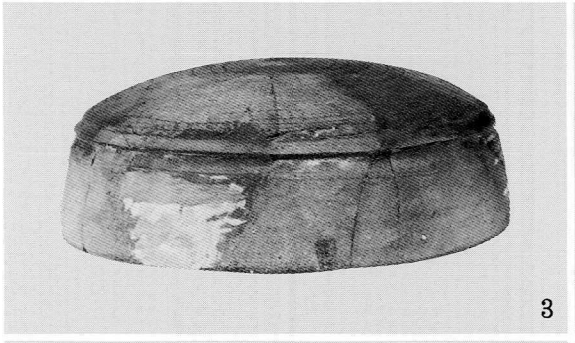
1. 溝2（SD−2）全景　　東より

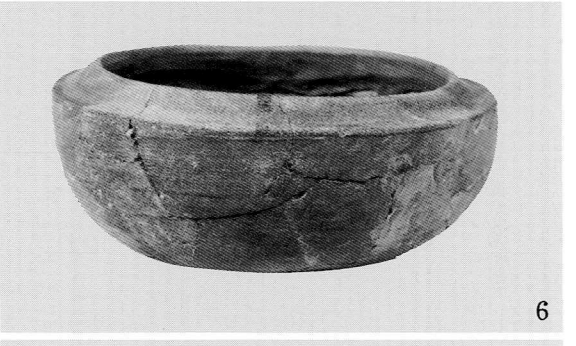
2. 調査区東部全景　　南東より

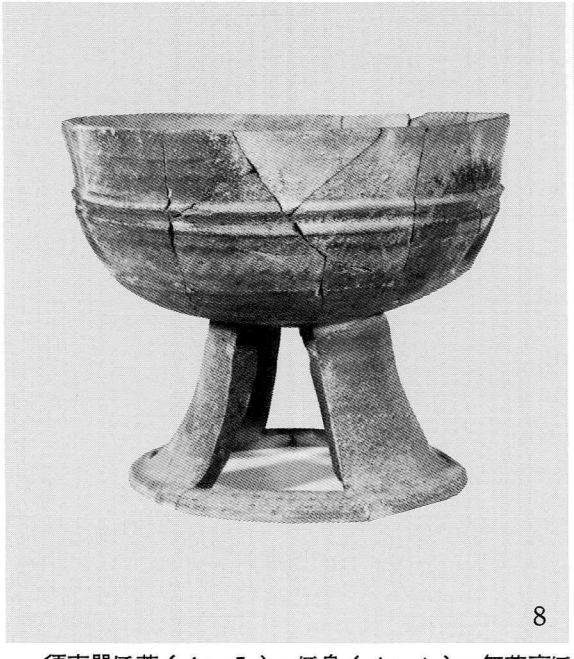
1. 古墳周溝内土層断面　　北より

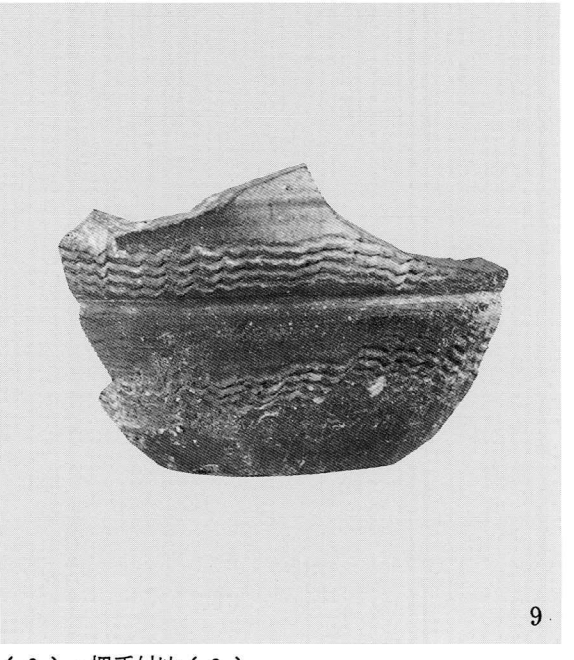
2. 井戸２（ＳＥ－２）内土層断面　　北より



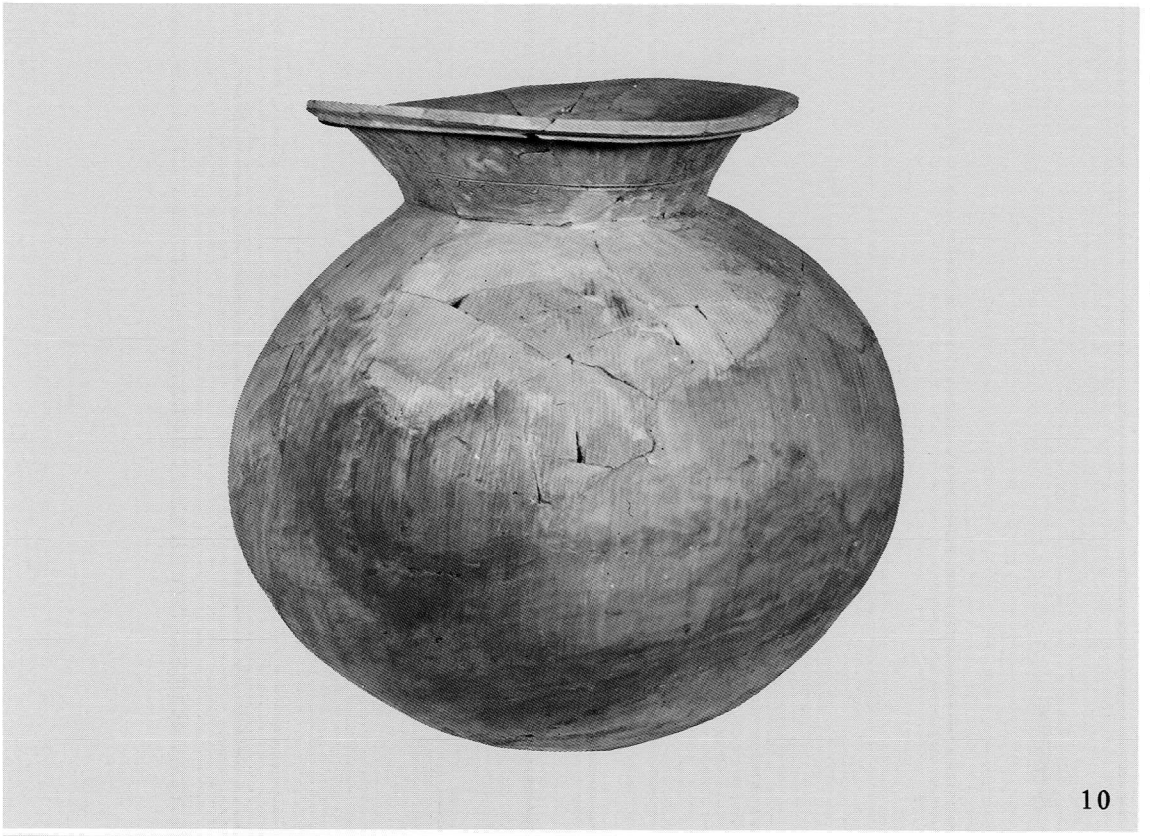




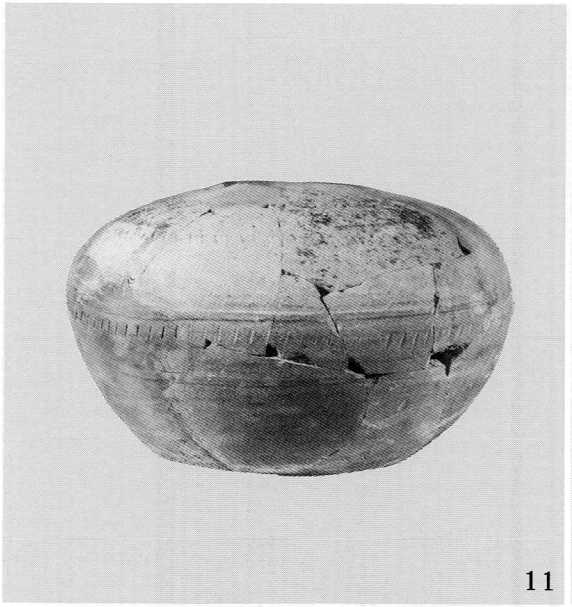


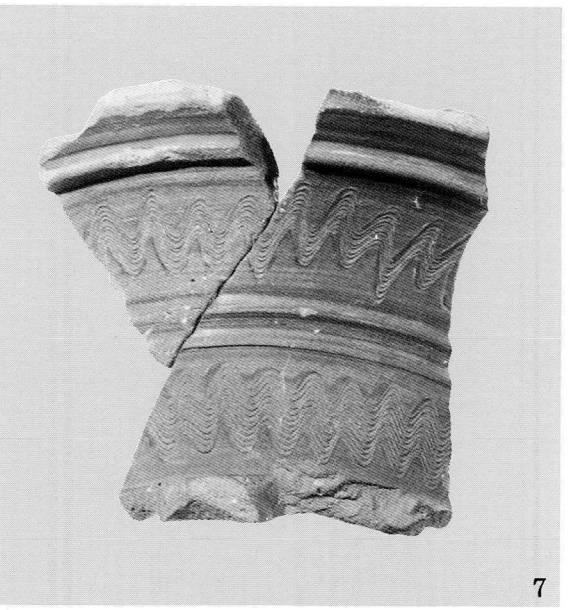


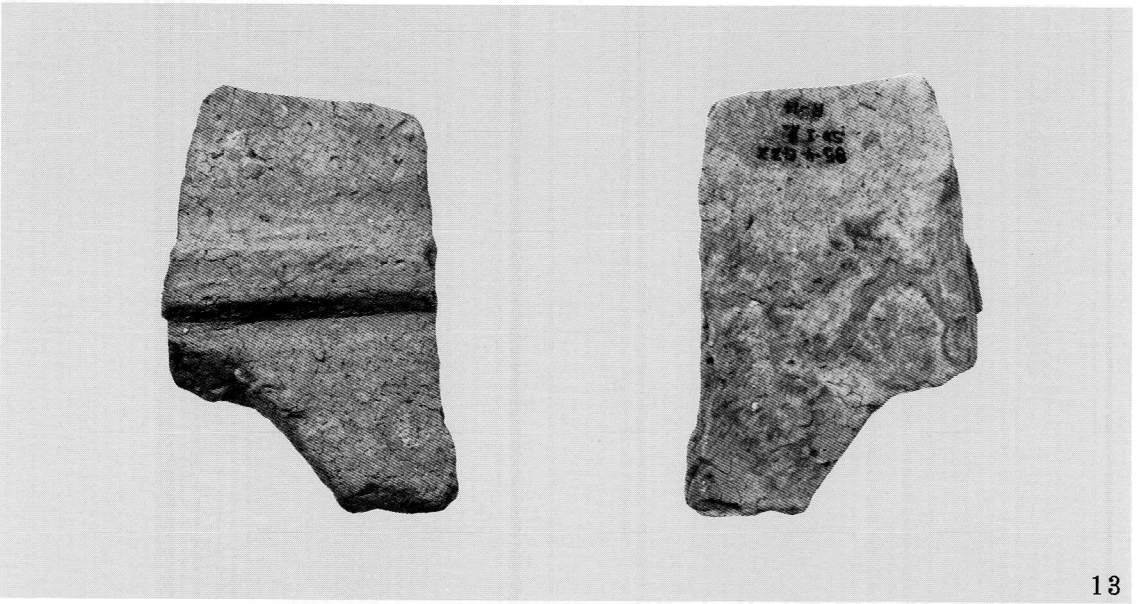
須恵器坏蓋（1～3）・坏身（4～6）・無蓋高坏（8）・把手付椀（9）

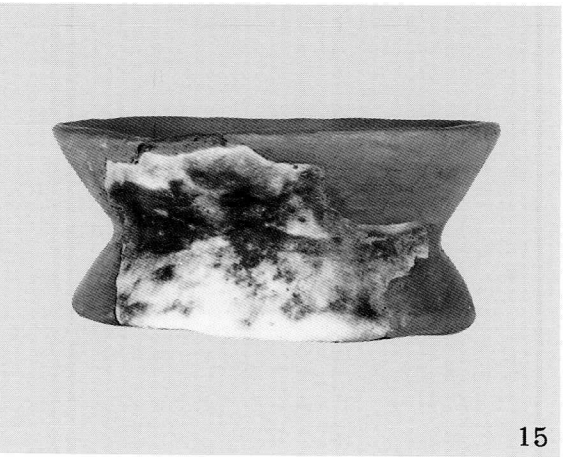


須恵器甕（10・12）

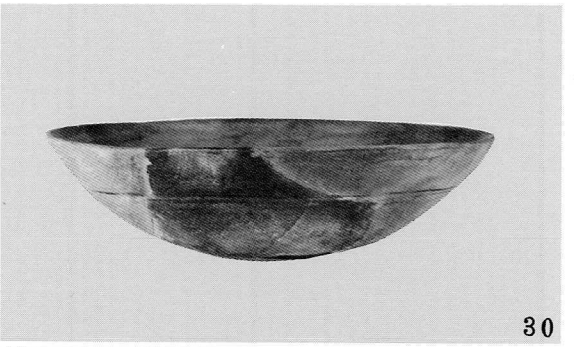


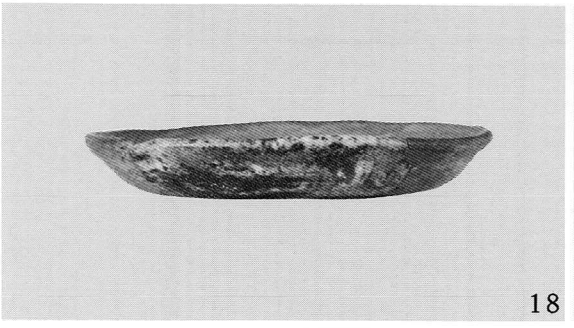


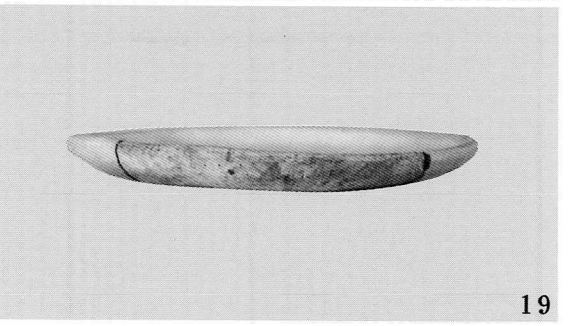


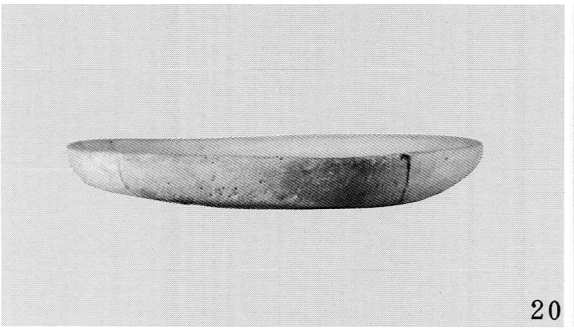


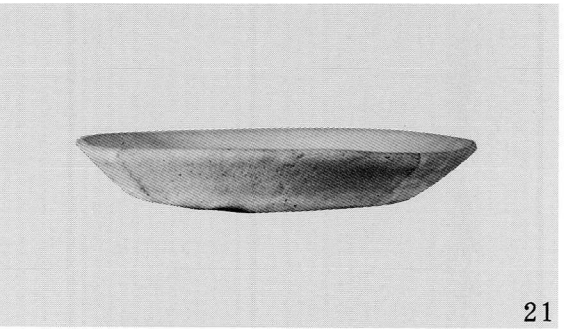
須恵器台付短頸壺（11）・甕（７），埴輪（13），黒色土器椀（14・15？）

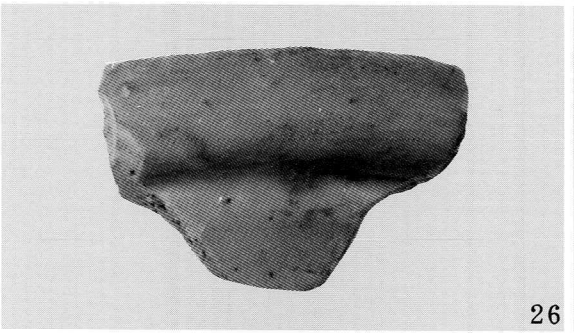


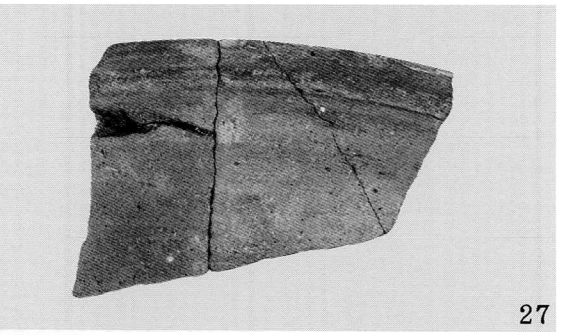


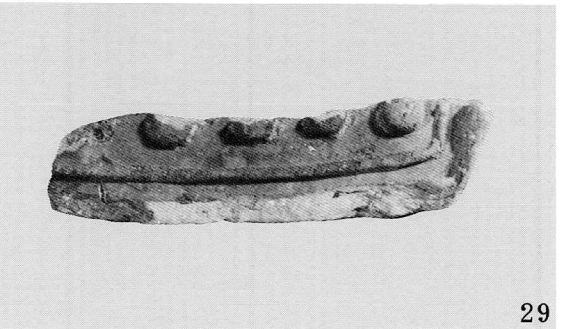






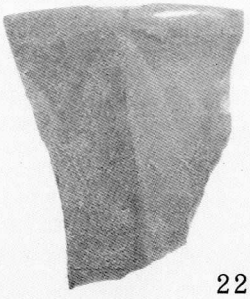


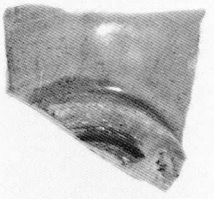


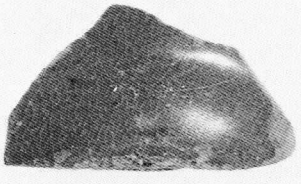


瓦器椀（16・30），瓦器小皿（18），土師器小皿（19～21），白磁碗（26），
須恵質陶器練鉢（27），軒丸瓦（28），軒平瓦（29）

17


22


24


31

23

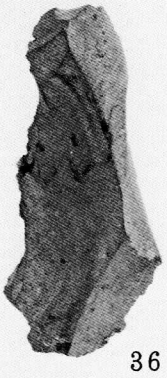
25

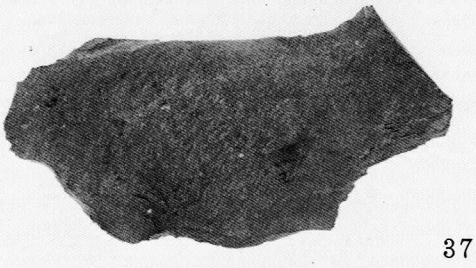
32

33

34

35


36


37

瓦器椀（17），青磁碗（22～25・31），ナイフ形石器（32・33），石鏃（34），剝片（35～37）